

第5回福井県高等学校教育問題協議会

協 議 資 料

<目 次>

● 第4回会議における意見・提案要旨

- 1 職業系学科の在り方に関する意見のまとめ P 1
- 2 地域の実情を踏まえた望ましい
高校の規模および配置について P 4

● 第4回会議における意見・提案要旨

1 職業系学科の在り方に関する意見のまとめ

※ アンダーライン部分は、第4回会議での意見

現状と課題

- ・ 社会のニーズと高校の学習との間、中学校と高校の間などに、様々なギャップが存在。
- ・ 進学率が上昇する一方、高卒者の就職先が狭まっている。
- ・ 生徒によっては、基礎的な学力が身についておらず、高校において補完する必要がある。
- ・ 生徒数の減少が進む中、子どもたちの希望をどう実現していくか。
- ・ 職業系学科は、1学科1学級が主流であり、このまま学校の小規模化が進めば、生徒の学習や学校の活動に支障をきたす。教育効果を高めるためには、一定の学校規模が必要。
- ・ 学科の細分化により、学習内容・目的がわかりづらくなっている。
- ・ 中学の時点で、生徒が将来設計を踏まえて進路の選択をすることは難しいが、職業に対する意識の植え付けは必要。
- ・ 複数の高校が連携して授業等を行う場合、相互の学校がある程度の学校規模を持っていないと、期待する教育効果が望めない場合がある。（小規模校同士では難しい。）
- ・ 職業系高校でプロフェッショナルを養成しても、就職先等、社会の受け皿が十分でない。

職業系学科の在り方

- ・ 将来の社会人としての職業観の育成、基礎的・基本的な知識・技術の習得を図ることが重要。
- ・ 自分の進路に対する明確な目的意識を持ち、専門分野を深く学ぼうとする生徒に対しては、スペシャリスト育成のための教育体制が必要。
- ・ 専門分野のスペシャリスト養成を図るとともに、進学希望にも対応するため、一定の規模の拠点校の導入を検討したかどうか。
- ・ 進路についての目的意識が明確でなく、高校において進路意識を高めようとする生徒に対しては、複数の学科に関する科目を学習することができる教育体制が必要。
- ・ 総合学科を検討する場合は、広く浅い学習によりモラトリアムの延長を招くことがないよう、目的が明確化した、特色のある学科とすることが必要。
- ・ 地元産業界や大学等との連携を強化し、長期インターンシップの実施など、実践的学習を充実する必要がある。
- ・ 専門的な学習を通して、生徒の人間教育、社会教育を充実させるべき。
- ・ 学科の分け方については、社会の多様化に対応するため、従来の農業・機械などの領域的な分け方から、農業システム・商業マーケティングなど、機能に着目した分け方を検討したかどうか。
- ・ 福井県の特徴を生かしたスペシャリストの養成を図ることが必要。

- 生徒に誇りや自信を持たせるために、地元企業等のバックアップを得ながら、生徒が自分たちで作ったものを商品化、販売していくといった実践的な教育が必要。
- 「産業界や大学との連携」を考えるに当たっては、教員が地元企業や研究機関等に研修に出向いたり、研究機関の研究者やあらゆる分野のプロの方々が授業を行うなど、教員と生徒の両方の側から連携の在り方を考える必要がある。

各職業系学科の在り方

商業系学科

- 長期インターンシップの実施など、地元産業界との連携の強化が必要。
- 社会に出てから即戦力となるような実践的教育が必要。
- 社会の新たなニーズに対応するため、地域の実情を踏まえながら、商業と農業との複合を検討したらどうか。

工業系学科

- 各学科の特色を出していくことと平行して、学科の選択・集中を図るべき。
- 学科名は電気、機械、建設等の基幹的なものとし、生徒が工業に魅力を感じるような学習内容やカリキュラムの見直しが必要。
- 県内各高校の同じ学科同士が連携を図り、夏休み等に生徒と教師がともに学ぶ研修を実施したらどうか。
- 長期インターンシップの実施など、地元産業界との連携の強化が必要。【再掲】

農業系学科

- 学習内容と就職先との関連性が薄くなっており、今後、学習内容・カリキュラム等の見直しが必要。
- 商業など、他の学科もあわせて学習し、自分の進路を考えることができる教育体制の検討が必要ではないか。
- バイオテクノロジーなど、工業と農業にまたがる技術がある。新しい産業へのマッチングを進めることで、農業学科への生徒の進路意識が高まるのではないか。
- 本県は農業県であり、農業の大切さを子どもたちに積極的に教えていくため、農業の勉強をする機会は確保すべき。
- 学習内容は、生産から流通までを含めた幅広いものにする必要がある。

水産系学科

- 学習内容と就職先との関連性が薄くなっており、今後、学習内容・カリキュラム等の見直しが必要。
- 社会のニーズに対応するため、観光部門での学習、あるいは「調理」に関する学習を取り入れたらどうか。
- 県立大学等との連携を進める必要がある。
- 高校の船の活用を図りながら、北陸3県の高校が連携した取組みが考えられないか。

家庭系学科、厚生系学科

- 介護福祉士など、関係する資格の取得にかかる条件が厳しくなっており、学科・教育内容の今後の在り方について検討する必要がある。

その他（新しい学科の導入等）

- 専門分野のスペシャリスト養成を図るとともに、進学希望にも対応するため、一定の規模の「拠点校」の導入を検討したらどうか。【再掲】
- 従来の学科の枠を越えた横断的学習を通して、多面的なものの見方・考え方を養う「総合技術学校」「総合産業学校」の導入を検討したらどうか。
- 単独での存続が難しい場合や、生徒が必ずしも第1志望ではなく入ってくる学校などは、総合性を持った学校で、学科の枠を越えた選択もできる柔軟な教育課程を編成する方向で考えたらどうか。
- 新しい学科の検討に当たっては、福井県独自の発想で、地域特性を生かしたものとすることを考えるべき。

2 地域の実情に応じた望ましい高校の規模および配置について

論点1

教育効果を高めるためには、どの程度の学校規模が必要か。

- ・ 1 学級当たりの生徒数
- ・ 1 学年当たりの学級数

【意見・提案等】

< 1 学級当たりの生徒数について >

- 少なければ少ないほどいいわけではないが、大体 30 人から 35 人の間ぐらいが適当ではないか。
- 標準法に基づけば、1 学級 40 人が標準であり、多くの県で 40 人という定員を設けている。福井県は、その 1 割少ない 36 人と、生徒にとっては恵まれた教育条件で教育をされており、可能ならば、この 36 人を維持していく方が望ましいと思う。
- この先、先生の数が増やせるかどうかということもあるが、1 学級最大 36 人として、それ以下の生徒数を先生に見ていただくのが、子供たちにとっては非常にありがたいことではないかと思う。
- 先生、何人の生徒をみることができるかという範囲はわからないが、35、6 人ぐらいがベターではないかと思う。
- 技術的、技能的なものを重視する職業系の場合には、人数は普通科よりも少なめにするといったことも考えた方がいいのではないか。
- 現状において、1 学級当たり平均 36 人となっていることは、教育委員会の努力のたまものと思う。1 学級当たりの望ましい人数は、予算の関係もあると思うが、35 人程度が適当かと思う。

< 1 学年当たりの学級数について >

- 教科と教員の数の関係や部活動と生徒数の関係などを考えると、教育効果を上げるためには、やはり 1 学年に最低 4 学級は必要だと思う。
- 学級数だけでは考えられない部分がある。小さくても光るものがある学校は残した方がいいという意見もあり、そういう点も十分に考えた上で最低の学級数を考えるべき。一般的・原則的には 4 学級ぐらいが適当と思うが、3 学級があってもいいのではないか。

- 望ましい規模を「4学級以上」としていても、財政事情や学校の活力等の関係で、実際は5学級以上になっている県も多い。新しく編制をするならば、ある程度の規模を維持することが望ましい。具体的には、1クラス36人で6学級以上をつくっていった方が、より学校の活性化を図ることができると思う。
- 最低でも3学級以上ないと、学級運営や学校行事、部活動に支障が出てくると思う。
- 4学級から8学級が望ましいと思う。
- 3学級しかない学校は、芸術に関しては生徒は選択できない。生徒たちに音楽・書道・美術など、選択肢を多く設けてほしいという思いがあり、学級数は多くしてほしいと思う。
- 3学級規模になってくると、部活動で野球やサッカーなど、人数の多い競技はできない。いろいろな部活動を生徒たちにやらせてあげたいと思っており、学級数を多くして、選択肢があるようにしていただきたい。
- 40人近い学級を担任している教師は、大変な思いでやっている。現状において、学級数が多い、生徒数が多い高校の在り方も同時に検討すべきではないか。
- 先生が、学年全部の生徒がわかるという人数が理想だが、10、11学級になるとそれは難しく、せいぜい6、7学級くらいであろう。

<その他の意見>

- 小さくても光るものがあるという部分は大事だと思う。その部分をどのように学校の特色につなげていくのかという観点から、様々な科目をどういう領域に取り入れていくかを考えることが必要。
- 職業高校に入る場合、中学の成績により決まることが多く、本当に農業や商業、ものづくりなどを勉強したくて入ったのかは疑問。こうした現状を踏まえると、生徒には、「これは学んできた」「これだけは知っている」という自信と誇りを持って卒業してほしい。そういう観点を踏まえて適正規模等の議論をすべきであり、大人だけが線引きをして、進めていくのはどうかという気がする。
- 学校を集約した方が、生徒1人が受ける恩恵は多くなるということも考えられる。できる限りの集約をしていく中で、教育効果というのを高めていくということが非常に大事ではないか。そうしないと、高校教育の内容の質が落ちてくるという懸念もある。
- 高校の校長をしていたときに感じたことだが、例えば5学級の学年が6学級になると、1学級違うだけですごく活気が出る。1学級増えるだけで随分変わる。それ以下の学校、特に普通科の場合は、やや活性化が図りにくいように思う。1学級36人とするならば、5学級から8学級規模が適当ではないかと考える。
- 適正な学校の規模や生徒数というのはあるのかもしれないが、学校や地域の特色を考慮し、多少の差はあってもいいのではないか。それによって学校独自の教育などが展開される場合もあると思われ、一律に数を決めて、全部合わせるということになると、特色のない学校ばかりになると思う。

論点2

県内各地区における全日制高等学校の配置はどうあるべきか。

【意見・提案等】

- 奥越に関しては、生徒が色々なことを学べる高校があってもいいのではないかなと思う。
- 嶺南においては、昔は農業も水産もすべて若狭高校にあり、それぞれの学科が別々の校舎で授業を行っており、授業を各学科の生徒が一緒に本校でやるということはなかった。部活動や生徒会活動については一緒にやることは可能であるが、複数の専門学科が一緒に学習するというのはなかなか難しいのではないかなと思う。
- 例えば、嶺南でいくつかの学校を統合するという場合があっても、校舎は現在の校舎を使わないと専門学科というのは成り立たない。
- 複数の校舎で授業をする場合、生徒の移動には、移動する間の安全性や距離の問題などの色々な問題があり難しいと思うが、先生が移動してやることは可能かもしれない。
- 生徒数の減少に伴い、教員数も減って十分な科目等の選択ができなくなってくるという弊害を、教師の数もそれほど減らすことなく、うまく融通することによって、いろんな選択の範囲内を維持できるのではないかな。
- 職業系高校のクラスが少なくなると、教職員の数の確保も厳しくなると思われる。現在の制度のことはわからないが、例えば外部講師を採用し、マネジメントや特定の技術を習ったりというようなことをしていけば、複合校にしても職業系の進む方向性はあるのではないかな。もっと外部の方の指導を仰ぐといった実践的な教育活動もあっていいのではないかな。
- 小浜に中学校が2つあり、不登校の子のために「ふれあい学級」がつくられているが、3年生になると、やはり進学したい、勉強したいという理由から、不登校の子がふれあい学級へ来るようになる。その子たちの半数以上が小浜水産学校への進学を選んでいるので、この理由は、大きい学校は行きにくく、水産学校は小さい学校だから行けるといことで、小さい学校には、そういう子供たちの受け皿としての部分はある。
- 今後の生徒の減少を考えると、学級が減るという問題ではなく、高校そのものの存続の問題にかかわってくる問題である。その場合でも、工夫によっては各学校の特性を生かしながら連携を図りながら機能を維持し、より生徒にとって選択の幅を広げていくということが可能ではないかな。

- 少子化が進む中、一定の学校規模の維持は避けられない大前提のひとつになると思うが、学校の中で多様化した学科を構成して、子供たちから見て魅力的な学校をつくっていくということを中心に検討すべき。
- 学校の統合によって、登校の時間や学校までの距離の問題が生じるため、十分に考えていただく必要がある。
- 嶺南には普通系学科の単独学校がない。やはり地元で勉強してほしいという思いがあるので、嶺南に1校だけでも普通科単独の高校をつくっていただきたい。
- 普通科と他の学科が設置されている学校の場合、学科によってはメリット、デメリットがあると思う。生徒たちにとってメリットが大きい配置を考えてほしい。